



Title	入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題と支援に関する研究
Author(s)	前田, 貴彦
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58915
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【6】

氏 名	まえ だ たか ひこ 前 田 貴 彦
博士の専攻分野の名称	博 士（看護学）
学 位 記 番 号	第 2 5 2 7 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題と支援に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 藤原千恵子 (副査) 教 授 永井利三郎 教 授 大橋 一友

論 文 内 容 の 要 旨

医療の進歩とともに、数年前までは治癒や寛解が難しいとされていた疾患が治癒可能となったり、長期間寛解状態を維持することが可能となってきた。このような現状に伴い、慢性的に疾患をもちながら生活する患者が増えるとともに長期間の生存も可能となってきた。同様に、小児期に発症した慢性疾患に対しても適切な治療や支援が行われることで、慢性疾患をもちながら成人期を迎える子どもが国内外問わず増加してきている。そして、慢性疾患をもつ思春期の子どもに対しては、成人期に達して問題に直面してから対応するのではなく成人期に達した時の問題を少なくするよう思春期・青年期からの関わりの重要性が示唆されている。加えて、国内だけでなく米国でも特別なヘルスケアが必要とされる若い成人への移行プログラムの目的を思春期から成人になっても維持できる質の高い、発達に即したヘルスケアを提供できる体制を作ることとしており成人への移行期である慢性疾患をもつ思春期の子どもに対し、入院中からの早期の支援が重

要であると言える。しかし、文献検討の結果、慢性疾患をもつ思春期の子どもに関する研究は十分とは言えず、中でも特に入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが抱える問題ならびにその問題に関する支援に焦点を当てた研究はほとんどみられなかった。

そこで、本研究では、第1・2研究において入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題とそれらの問題を軽減したり解決したりするために必要であると認識する支援について検討した。また、第3研究では、支援の中心的役割を担う看護師自身が入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題に対するアセスメント能力を測定できる尺度の開発を試みた。

第1研究は、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもがどのようなことを問題として認識しているかを明らかにすることを目的に、平成21年8月～11月に東海地方の2県に在住する13～18歳の慢性疾患で入院中または退院後1年以内の思春期の子ども10名に半構成的面接を実施し、質的帰納的に分析した。

その結果、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題として、【異性の看護師への抵抗感】【治療や症状の影響による心身の苦痛】【将来の生活への不安】【規則や環境による日常行動の制限】【入院により生じる孤独】【維持・発展しにくい人間関係】【気持ちを理解していない看護師の対応】の7のテーマが生成された。そしてこれらの問題は、大きく「思春期の年代の特徴が優位に影響する内容」と「疾患の影響が優位に影響する内容」の2つの側面からなることが示唆された。

また、「思春期の年代の特徴が優位に影響する内容」では、異性への意識や羞恥心の高まりから生じる【異性の看護師への抵抗感】や特別支援学校通学の場合では「学習内容が遅れることへの不安」といったように慢性疾患をもち入院している場合でも、思春期の年代の子どもが一般的に抱く内容と共通したことを問題として認識しており、思春期の年代であるがゆえに生じていることが示唆された。よって、看護師は入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが健全な発達を遂げるためにも思春期の年代の発達段階に必要となる支援を提供していくことも重要な役割である。

さらに、「疾患の影響が優位に影響する内容」では、掻痒感の出現や低血糖症状等の「治療や身体的症状の出現に関連した苦痛」や病気や継続治療をもちながらく希望の職に就けるかの不安>、「病気が結婚や子どもに影響することへの不安」といった疾患の影響を意識することで生じた問題であることが示唆された。これらの問題への対応には、医師の診察や遺伝医療など看護師だけでは十分な対応が難しいこともあるため関連する専門職者との連携の重要性が示唆された。

第2研究では、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識している問題に対し、それらを軽減・解決するために誰からのどのような支援が必要と認識しているかを明らかにすることを目的に、第1研究同様、平成21年8月～11月に東海地方の2県に在住する13～18歳の慢性疾患で入院中または退院後1年以内の思春期の子ども10名に半構成的面接を実施し、質的帰納的に分析した。

その結果、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題を軽減・解決するために必要としていた支援者とその支援として、【同年代の同性者による傾聴と交流】【同年代者による交流】【同類疾患をもつ経験者による情報提供】【医療者による情報提供と対応】【同性の医療者による情報提供と対応】【医療者以外の職者による情報提供と対応】【家族による対応】の7のテーマが生成された。そして、これらの支援者とその支援は、「自己との共通性を持つ者による支援」と「専門的な知識や立場を持つ者による支援」の2つの側面からなることが示唆された。

また、「自己との共通性を持つ者による支援」では、同性や同性の同年代による交流や情報提供、同類疾患をもつ患者による情報提供を求めている、同年代や同性、共通性を好むといった思春期の年代の特徴によ

る影響を受けていることが示唆された。よって、これらの支援者による支援が効果的に得られるよう、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもにとって身近な存在である看護師が中心となり関連機関と密に連携をとりながら、入院中に認識する問題を軽減・解決するために必要であると認識している支援を検討し、提供していくことが必要である。

さらに、「専門的な知識や立場を持つ者による支援」では、看護師や医師による病気や治療の説明、特別支援学校や原籍校の教員による学習支援や情報提供を必要な支援とし、入院中に認識する問題を軽減・解決するために専門的な知識や技術が必要と判断した際は、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもは最適な立場の支援者を選択し、その支援が必要であると認識し、求めていることが示唆された。そのため、看護師や医師だけでなく、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題を軽減・解決するために必要であると認識している様々な専門的知識や技術、立場を持つ者による支援体制を確立し、それらを維持していくことの重要性が示唆された。

第3研究では、第1研究結果を踏まえて、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題に対して、小児看護を実践している看護師がどの程度捉えることができているかを把握する自己評価尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。そして、平成22年8月1日～同年10月31日に全国の病院の内200床以上で小児病床を有する111施設で慢性疾患をもつ思春期の子どもの看護を実践している看護師1,519名を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。

836名から回答が得られ有効回答810名を分析した結果、開発した尺度は、『病気・治療・入院の影響に関する問題(5項目)』『病院・病棟の環境や規則・制限に関する問題(5項目)』『看護師の対応や気持ちの理解に関する問題(3項目)』『看護師の言動に関する問題(2項目)』『入院中の人間関係に関する問題(2項目)』の5因子17項目から構成された。

そして、尺度全体のCronbachの α 係数は0.90、各下位因子がすべて0.7以上であった。Spearman-Brownの信頼係数においても全体で0.8以上、各下位因子がすべて0.7以上であり、内的整合性は保たれていた。

また、標準妥当性はKM0を測定した結果0.916と高い値を示した。併存的妥当性についても、外的基準である看護問題対応行動自己評価尺度の総得点と今回開発した尺度のPearsonの積率相関係数は、尺度全体（ $r=0.421$ 、 $p=0.000$ ）および各下位因子間（ $r=0.205-0.422$ 、 $p=0.000$ ）いずれの相関においても有意差がみられた。

さらに、開発した尺度では、小児看護経験年数が5年未満に比べ5年以上の看護師や小児看護希望ありの方が有意に問題を捉える程度が高い（ $p<0.01-0.001$ ）といったように、背景要因の差異により問題を捉える程度に有意差を認めた。よって、今回開発した尺度は、様々な背景をもつ看護師の入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題に対するアセスメント能力を測定できると言える。

論文審査の結果の要旨

医療の進歩とともに、慢性疾患をもちながら生活する子どもが国内外ともに増加しており、その中でも特に成人期への移行期にあたる思春期の子どもへの早期からの支援の重要性が示唆されている。しかし、小児医療・看護の分野において、思春期の年代は小児期と成人期の狭間であることや看護基礎教育においても思春期の子どもや慢性疾患をもつ10代の子どもに関する系統立った教育は行われていないため、入院中からの早期の支援が十分提供されているとは言い難い現状である。

そこで、本研究では入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもに対する効果的な支援を検討するために、第1・2研究では、2県に在住する13～18歳の慢性疾患で入院中または退院後1年以内の思春期の子ども10名から得られた面接内容を分析し、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもが認識する問題と必要な支援について明らかにした。分析の結果、認識する問題は、〔思春期の年代の特徴が優位に影響する内容〕と〔疾患の影響が優位に影響する内容〕の2つの側面であることが示唆された。また、必要とする支援に関しても〔自己との共通性を持つ者による支援〕と〔専門的な知識や立場を持つ者による支援〕の2つの側面であることが示唆された。

また、第3研究では、第1研究の結果を踏まえ、現在、入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもの支援の中心的役割を担っている看護師のこのような子どもが認識している問題に対するアセスメント能力を測定するための尺度開発を行った。全国111施設で入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもの看護を実践している看護師1,519名を対象に質問紙調査を行い、836名から回答が得られた。そして、有効回答810名を分析の結果、5因子17項目からなる信頼性と妥当性が確保された看護師の問題に対するアセスメント能力自己評価尺度が開発できた。

これらの研究結果は、未だ十分ではない入院中の慢性疾患をもつ思春期の子どもへの支援を看護師が実践する際に有効に活用できるだけでなく、看護師の問題に対するアセスメント能力への影響要因についても検討することができ、看護師のアセスメント能力の向上および看護学教育の発展にも寄与できると考える。

以上のことにより、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと考えられる。